様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 5 月 18 日現在

研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2005～2008
課題番号：１７５２０３３４
研究課題名（和文）　関連性理論によるジョークと笑いの分析：音声的類似性から命題形式の類似性まで
研究課題名（英文）A Relevance-Theoretic Account of Jokes and Laughters: From Resemblance in Linguistic Sound to Resemblance in Propositional Form

研究代表者
東森　勲（HIGASHIMORI ISAO）
龍谷大学・文学部・教授
研究者番号：20148604

研究成果の概要：英語ジョーク理解はふつうのコミュニケーションの意味理解と同じメカニズムを用いている。ジョークのために特殊な装置は必要がない。類似性にもとづくコミュニケーションは人間のコミュニケーションの基本であり、その類似性にもとづくジョークと、推論にもとづくジョークとは理解の段階で、共通点があり、どこか（表現同士、あるいは、知識と表現）にずれが生じ、それにより、効果として笑いが生じているのである。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2005 年度	1,200,000	0	1,200,000
2006 年度	600,000	0	600,000
2007 年度	500,000	150,000	650,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
総　計	2,800,000	300,000	3,100,000

研究分野：認知語用論
科研費の分科・細目：言語学、英語学
キーワード：関連性理論、ジョーク、類似性、推意、アドホック概念形成、ことわざのもじり

１．研究開始当初の背景

関連性理論ではジョークに関する研究が世界的にもまだ少なく、日本国内で、ジョークに対する関連性理論からの解明という理論的側面も筆者が、『関連性理論の新展開：認知とコミュニケーション』 研究社のなかで、４.4.4.笑いの分析：ジョークの分析で扱ったのみで、その展開がまだどこにもなかった。世界での、関連性理論でのジョークに関する論文も次のものがあるくらいであった。

Muschard, Jutta (1999)Jokes and their relation to relevance and cognition or can relevance theory account for the appreciation of jokes? *Zeitschrift fur Anglistik und Amerikanistik* 47(1) 12-23.

Yus, Francisco（2003）Humor and the search for relevance. *Journal of Pragmatics* 35, 1295-1331.

２．研究の目的

英語ジョークの理解を関連性理論を用いていくつかのタイプに分けて研究することである。

（１）類似性に基づくジョークと推意に基づくジョークとの違いは何かということを解明すること、さらに、ことわざなどのもじりがジョークとなるようなタイプの分析、日本語の川柳などの笑いと英語のジョークの比較分析などを主にターゲットとして、なんらかの、聞き手の側の解釈における衝突、ねじれがおこっていることを最終的には解明することが目的である。

（２）ジョーク(joke)の笑いとは何か？ Pun(だじゃれ)、Riddle(なぞなぞ)、 Parody、Definition ジョーク、Ironical ジョーク、広告、落語、Comedy など、データとしてのジョークの中にはかなりのばらつきがあるので、どのようにジョークを定義するかも問題がある。

（３）話し言葉ジョーク、書き言葉（書記法）ジョークという点での研究もする必要がある。

（４）類似性(resemblance)に基づくジョークの分類とは何か？ 音声的、統語的、意味的（命題形式）類似性による分析のみでなく、通常のジョーク以外に、メタ言語的ジョークの分析も必要となる。

（５）推意に基づくもの
関連性理論で、筆者は『関連性理論の新展開：認知とコミュニケーション』で次の4つのタイプのジョークを提案した。

タイプ１ 矛盾した推意により生ずる（Contradictory implicatures）ジョーク

タイプ 2 ばかげた想定（An absurd assumption）を用いて生ずるジョーク

タイプ３ ばかげた推意に基づくジョーク

タイプ４ ２つの矛盾する想定（Two contradictory assumptions）に基づくジョーク

推意に基づくジョークにはこの４つのタイプ以外にどのような可能性があるかを解明することが必要である。

３．研究の方法

（１）ジョークの分析をするためのデータの収集が必要であるので、さまざまな手段で、データを入手した。日本語による本（たとえば、小泉保(1997)『ジョークとレトリックの語用論』大修館などでは伝統的な語用論の枠組みであり関連性理論がまったく入っていないものであり、データも日本語が中心で、あまり、使い物にならなかった。

（２）また、日本語で書かれている本（たとえば丸山孝男(2002)『英語ジョークの教科書』大修館、丸山孝男(2005)『英語脳はユーモア・センスから』ＫＫベストセラーズ）などでは、単にジョークの例のオンパレードで、どのような原因でジョークの解釈にいたるかという一貫した分析は皆無で、使い物にはならないというのが日本における本として出版されているジョーク関係の現状である。

（３）それで、英語ジョークのなまのデータを分析するにはまず、それぞれの地域に基づくジョークのデータがうまく整理されていないので、海外で学会発表にいくたびに、現地でのデータ収集として、英語ジョークのデータを本の形で、カナダ（バンクーバー、トロント）、アメリカ（ハワイ）、ニュージーランド（オークランド、クライストチャーチ）、イギリス（ロンドン）、オランダ（ライデン、アムステルダム）などで現地で収集した。また子供のジョークを中心にアマゾンを通じて多数のジョークの本をデータとして入手し、それらを類似性に基づくジョーク、推意に基づくジョーク、ことわざのもじりに基づくジョーク、メタ言語に基づくジョークなどとして、データとして整理した。

（４）理論的に、関連性理論を用いて英語ジョークの分析をしているものを、CiNii,や British Library でのサーチに基づき、最新のものまで入手して、批判的に読み進めた。（たとえば、*Lodz Papers in Pragmatics* 4 (2008): 67-93 に載った Francisco Yus の A RELEVANCE-THEORETICCLASSIFICATION OF JOKES など）

（５）これらの、データと分析方法は関連性理論を用いて論文を作成して、海外で発表して、いろいろとコメントいただき、さらに、

英語ジョークの理解を深めた。海外では最初、ニュージーランド言語学会、つぎにカナダでの LACUS（アメリカ、カナダ言語学会）の学会、さらに、フィンランドでの Societas Linguistica Europaea(ヨーロッパ言語学会)での発表、ハワイでの国際教育学会での発表、オランダ、ライデン大学での Rhetoric in Society(社会におけるレトリック学会)で発表した。

４．研究成果

（１） 推意に基づくジョークは上記の４つのタイプ以外の、次のものがあることがわかった。

タイプ５　平行処理に基づくジョーク
There are three kinds of lies: a small lie, a big lie and *politics*.

タイプ６　修辞疑問文によるジョーク(9)A strict aunt came to tea and said to her niece, “Eat up your spinach, child, and you'll grow up to be beautiful.”
“*Didn't they have spinach in your day Auntie*?” came the reply.--Kids Jokes (1998:19)

タイプ７　定義によるジョーク
A Full name is what you call your child when you are mad at him

タイプ８　エスニックジョーク
My Scottish friend got married to a girl born on February 29. Why?
He has to buy her a birthday present only once every four years. (丸山,p.246)

（２）英語ジョークのデータに基づく類似性に基づく分類と推意に基づく分類を細かく行ったが、その共通点として、類似性とはもとの形式と別の形式の類似性として分析がされるが、別の観点からは、似た表現が衝突していると考えられ、推意に基づくジョークは計算をする中で暗に言われる情報と、通常の知識などのずれがあり、衝突をしているので、両者は実は形はちがいように見えるが、同じ認知的メカニズムと結論づけた。

（３）ことわざをもじったものがジョークのデータも本来のジョークの形とそのずれを扱うことにより、衝突が生じて、おもしろさが認知効果として関連性理論では説明可能となる。

（４）英語ジョークと代名詞の指示のずれ、表意の saturation によるジョークの分析となる。これも、通常の代名詞の指し示すものとジョーク解釈ではずれがあり、このずれがおもしろさを生み出すと分析可能である。

（５）英語ジョークと表意で欠けている要素の復元で、ずれが生じるので、衝突するとジョークとなる。次の例では Absence はだれが休んだかを補うと、ふつうは、その子供が休んだとなるが、おちでは、となりの子供が休んだから試験ができなかったと、ずれるところがおもしろさの原因となる。

Dad: Why did you get such a low score in that test?
Kid: Absence.
Dad: You were absent on the day of the test?
Kid: No, but the boy who sits next to me was. Howell(2003:57)

（６）ポリテイカル・ジョークの分析には政治に関する知識や文化的な知識の関与がコンテクストとして必要であるが、これも通常のスクリプトの衝突として分析が可能である。

ジョークと翻訳の問題、英語ジョークと日本語の川柳の類似性と違いについても扱かった。

続柄あわてて「妻」を「毒」と書き
食べすぎに待っているのは体重計（毎日新聞）

のような日本語の川柳のおもしろさも、メタ言語により、文字の書き方の正しいものと、類似した形の文字とか、音の類似したものであり、やはり、英語ジョークのおもしろさと同じく、何らかの類似性に基づく分析がされるとわかった。

（７）海外で、2 件の論文出版の準備中である。今回のジョーク研究で１つはフランスの大学から出版される論文集のなかの１論文として収録される予定である（現在印刷中、*But/Yet/However* in English Jokes: A Relevance-Theoretic Account)、もう１つはオランダ、ライデン大学での大会論文が Proceedings として、CD で出版される中に選ばれた（いま CD 作成中、Understanding Political Jokes: Are There Any Rhetorical and Cognitive Characteristics?)。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① Isao Higashimori, New Perspectives on Understanding Jokes: A Relevance-Theoretic Account、龍谷学会論集、査読なし、471 号、2008 年、51-69

② 東森勲、英語のジョークと川柳の笑いについて：関連性理論による分析、『言外と言内の交流分野：小泉保先生傘寿記念論文集』大学書林、査読なし、2006 年、507-523

〔学会発表〕（計７件）

① Isao Higashimori, Understanding Political Jokes: Are There Any Rhetorical and Cognitive Characteristics?, Rhetoric in Society, 2009.1.20, Leiden University

② ISAO HIGASHIMORI, JOKES, AD HOC CONCEPT CONSTRUCTIONS AND TWO CONFLICTING FRAMES: A Relevance-Theoretic Account, 7th Annual Hawaii International Conference of education 2009.1.4, Waikiki Beach Marriott Resort & Spa

③ 東森勲、翻訳と関連性理論について：漫画翻訳からジョーク翻訳まで、日本通訳学会（専門研究会）、2008.8.30、神戸女学院

④ Isao Higashimori, Jokes and Reference Assignments: Functionalism Vs. Cognitive Pragmatics, 40th Annual Meeting of the Societas Linguistica Europaea, 2008.8.24,University of Joensuu

⑤ 東森勲、ジョークと類似性：関連性理論による分析、第２０回表現学会近畿例会、2007.1.14、同志社大学

⑥ Isao Higashimori, Proverb Variation and Jokes; A Relevance Theoretic Account, 33rd LACUS , 2006.8.4, University of Toronto

⑦ Isao Higashimori, A Relevance-Theoretic Account of Jokes: Resemblance-Based Jokes and Assumption/Implicature-Based Jokes Linguistic Society of New Zealand, 2005.11.18, University of Auckland

６．研究組織
(1)研究代表者
東森　勲（HIGASHIMORI ISAO）
龍谷大学、文学部、教授
研究者番号：20148604

(2)研究分担者

(3)連携研究者